

第 32 回 「ことば」 フォーラム

映像作品から話しことばを考える

2007 年 6 月 30 日 (土)

国立国語研究所 講堂

品田 雄吉 (多摩美術大学名誉教授)

尾崎 喜光 (国立国語研究所)

小河原 義朗 (北海道大学留学生センター)

後援 : 立川市

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会 それでは時間となりましたので、第 32 回「ことば」フォーラムを始めたいと思います。今日のテーマは「映像作品から話しことばを考える」ということで、これから 4 時半まで約 3 時間ですけれども、お付き合いください。私、今日の総合司会をさせていただきます国立国語研究所の野山広と申します。よろしく願いいたします。早速ですが、国語研究所所長の杉戸より御挨拶^{あいさつ}を申し上げたいと思います。

杉戸 皆様、ようこそお越しくださいました。なんかはっきりしない梅雨になっておりますけれども、その半ばのこの時期、なんとか良いお天気に恵まれました。週末土曜日の午後であるにもかかわらず大勢の皆様にご参加いただき、本当に有り難く存じます。ありがとうございます。この「ことば」フォーラムという催しですけれども、私も国立国語研究所が毎年 2 回あるいは 3 回ずつ開いてきているものであります。今回で第 32 回になります。日本語をめぐって、あるいは日本語を含む言葉そのものをめぐって、その時々話題を選びまして、世の中の言葉のあり方、あるいは言葉の研究で分かったことなどをテーマにして、その都度企画しております。言葉の研究あるいは言葉の教育に直接携わる方、専門家だけでなく、いろいろな分野でお仕事をなさっている方、あるいは御家庭でお仕事をなさっている方など一般の皆様にもお聞きいただき、言葉について御一緒に見つめ直したり、あるいはちょっと立ち止まって考え直す、そんな機会となるように心掛けて進めてきているものであります。今日は御案内のとおり、「映像作品から話しことばを考える」というテーマを選びました。後ほど担当者から詳しい趣旨は説明いたしますが、ここで扱う映像作品は映画、テレビドラマ、あるいは言葉・外国語を勉強するときのために作られた映像教材、そういったものを幅広く考えております。普段の言葉による会話・コミュニケーションをちょっと考えると不思議なことだと思うんですけれども、言葉だけで成り立っているのではない、これを言葉のコミュニケーションと呼んでいるという、そういうところがあります。言葉以外の話し手あるいは聞き手の動作・身振り・表情、あるいはその場その場の情景とか、机の配置とか空間の構成とか、そういったいろいろなことが会話やコミュニケーションを支えています。そういうわけですから、言葉によるコミュニケーションを考えるためにも言葉だけを見ているのでは十分ではない、そんなことを日頃日常的に感じます。例えば今日のテーマである映像作品が作られる場合も、台詞は言葉そのものであるわけですが、言葉以外に人物の映像・動作・表情、あるいはその場

その場の状況設定が脚本・台本の中で様々に工夫され指定されて、初めてその作品が出来上がるわけであります。言葉を考えるとき、あるいは言葉の教育を考えるときに、言葉だけでなく、言葉以外の物事をきちんと視野に入れること、これは欠かせないと思うわけです。その際、映像作品は誠に重要な役割、あるいは具体的な手掛かりを与えてくれる役割を果たしていると思います。今日のこのフォーラムでは、日本の名画といわれる映画を例にさせていただいたり、あるいは私ども国語研究所がこれまで作ってきておりますビデオ映像の作品がありますが、これを例にしたりして進めてまいります。そうした具体的な映像作品を見直すこと、そしてその中の言葉を改めて言葉以外のものと一緒に見直すことで、言葉について考え直すときの視野をもう一步広げる、あるいは別の視点を得ていただく、そんな機会になることを期待しております。今日のために、映画評論家として長く御活躍になっている品田雄吉さん、それから外国人への日本語教育で特に音声とか話し言葉を専門になさっている小河原義朗さんにそれぞれお話をお願いすることができました。ありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。今日の会については、地元の立川市からの御後援をいただいております。厚く御礼申し上げます。お二人のほか、私ども研究所員の尾崎喜光からも国語研究所のビデオ作品を御紹介しつつ、それに関するお話も含めて会を進めてまいります。夕方までの短い時間ではありますが、御来聴いただいた皆様方それぞれに、先ほど申しましたように、普段の言葉やコミュニケーションについて映像作品を手掛かりにしてちょっと立ち止まって考えていただく、そんな時間を過ごしていただければ幸いです。毎日の暮らしの中で言葉というものを改めて見つめ直す、そういう時間を取り戻したいと日ごろ私などは思っております。そうしたきっかけを今日この午後に経験していただく、あるいはそういうきっかけをお持ち帰りいただけることを期待して、最初の私からの御挨拶といたします。どうもありがとうございました。

司会 このあと品田雄吉先生のお話にまいりたいと思います。その前に若干趣旨説明ということで時間を取らせていただきますけれど、ほとんど杉戸所長の話の中に趣旨が入っていたように思います。もう少し具体的な話をさせていただければ、今日、品田先生に御紹介していただく映画もそうですし、国語研究所で作っているビデオもそうなんですけど、作っていても、あるいはその作品のクオリティーがどんなに高くても、なかなか見ていただけない、あるいは活用されない状況も世の中にはままあるわけですけど、そういった状況から少しでも使っていただけるようにするにはどうしたらいい

いかという問題を含めて、あとはどういふふうを活用すれば、例えば日本語教育の現場で、あるいはほかの言葉の教育の現場で、通常の生涯学習の現場で活用できるのか、効果的に使うにはどうしたらいいかというようなことを、このフォーラムを通して、その事例を御紹介するとともに一緒に考えることができたらなあというふうに思いまして、この企画をいたしました。今日、最初の品田先生のお話ではふんだんに映像を紹介していただく予定ですので、それを十分に満喫していただきながら、品田先生のお話を聞いていただければと思います。時間もあまりありませんので、このまま品田先生のお話に移りたいと思います。では、よろしく願いいたします。品田先生が席に着かれる前に、先生のプロフィールを若干説明させていただきたいと思います。品田先生御自身は北海道でお生まれになりまして、北海道大学を卒業をされた後に映画関係のお仕事をずっとされていて、先ほど所長からもありましたように、映画評論家として長い間仕事をされていました。1989年から十数年の間は多摩美術大学の教壇に立たれておりまして、今は多摩美大の名誉教授でもあられます。今日は、実は国立国語研究所のビデオ制作委員会の委員として参加していただいているという状況もあります。あとで、「ことばビデオ」の中身についても御批判をいただければと思っております。今日はよろしく願いいたします。

「ことばと映像」品田 雄吉

(配布資料 p. 1～3)

品田 品田雄吉と申します。よろしく願いいたします。ちょっと座って話をさせてください。私、この国立国語研究所には「ことばビデオ」の関係で何度か来たことはあるんですけども、本当のことを言いますと、今日どういふ催しがあるのかほとんど分かっていなくて、ただ来いと言われたから来たというような感じなんです。国立国語研究所の建物はすごく立派で、立派な組織だから、日本全国から国語の研究者がいっぱい集まるのかとか、恐ろしい所だなと密かに思っていたんです。そうではなくて、皆さん、地元の方とか、いわゆるそういう専門家でない方が今日はお見えになっているので、少しごまかせるかなと思ってホッとしています。ごまかしは利かないかもしれませんが、気持ち的にはちょっと楽になっています。私に与えられている時間は40分くらいということで、その中で映像もちょっとお見せしたいと思っておりますので、そんなにたくさんはお話しできないと思います。「ことばと映像」ということで、私の考えていることを皆さんにお話しして、皆さんも「いや、言葉と映像の関係はあいつ

が言っているだけじゃないぞ」というようなことをお考えになったりしていただける
と、そこからまた話し合いが展開するみたいなことがありますので、そのきっかけに
なればいいのではないかと思ってお話をいたします。皆さん、これはお持ちなんです
か。ああそうですか。私が書いた短いものを皆さんお持ちだと思いますけれども、こ
れはアウトラインです。私は映画が専門なので、映像を広げないで、一応映画に絞っ
て、とりあえずここではしゃべってみようかなと思います。映画というのは、生まれ
たときに音はなかったんですね。サイレントだったんです。ただ、言葉はありました。
ですから言葉と映像という意味では、映画が誕生したときから言葉はありました。ど
ういう形であったかという、「字幕」があって、劇映画の場合ですと、そのときの登
場人物の台詞が字幕で出てきます。御年配の方は、昔見て覚えていらっしゃる方もい
ると思います。それから、台詞だけではなくて、今、突然思い出したのですけれども、
有名な桂小五郎か坂本龍馬か忘れましたが、そういう維新の士が京都で雨が降ってい
るところを出掛けるという有名なシチュエーションがありまして、「春雨じゃ濡れてい
こう」みたいな名台詞があるわけです。そういう映画の場合には、それが字幕で出る
わけですね。ですから言語はあったんです。ただ、音はなかった。サイレントとい
うのは音がないという意味なので、言葉はありました。今、時代劇の例を挙げましたけ
れども、日本の時代劇などでも、五七五調の字幕を作って、それを我々が読むと、リ
ズムがありますから、そのリズムに乗って次の画面に入っていくみたいな形で、映画
全体のテンポがそこから生まれてくるとか、そういう特色がありました。1930年代に
なりますとトーキーになるわけですが、トーキーになると、そういう文字の言
葉によるリズムの作り方はなくなるんですね。そのかわり、登場する人たちのしゃべ
る台詞によって、テンポが生まれたり、リズムが生まれたりというふうに変わってい
きます。昔のサイレント映画などを見ると、ご覧になった方はたくさんいらっしゃる
と思いますが、サイレント映画時代のほうがむしろ言葉で表現するのが簡単に
できたりしまして、例えば何かいろいろあって夜が更けて朝になるみたいなときに、
字幕で「夜も更けて」などと出るんです。そうすると、それでもう分かってしまうん
です。それから、「あくる朝」などという字幕が出ます。トーキーになると、これがな
かなかやれなくなりまして、そうすると暗い情景を映さないと「夜も更けて」とい
う感じを伝えることができないとか、昔サイレントのときは字を出すだけでそれがもう
分かったのに、一つ余計な画面を作らないといけないみたいな表現の変わり方もあり

ます。「朝になりましたよ」と知らせるためには、ニワトリが鳴くとかなんかやるわけです。それは、サイレント時代は「そして朝になる」という字幕を出せばすむというように非常に簡潔な表現ができた。トーキーになることによってかえってその簡潔さが失われたということもありまして、考えてみると、言葉と映像の関係はなかなかそう簡単にはいかないというか、やっかいなところがあるんです。サイレント映画時代の言葉による名作といきましょうか、名ラストシーンといきましょうか、ここにちょっと書いていますけれども、喜劇の王様といわれているチャールズ・チャップリンはご存じですね。この人はずーっとしゃべるといことに抵抗して、世界中がトーキーになっても、まだ頑張ってサイレント映画を作り続けた人です。いちばん最初に彼は、音楽が入る映画とか音の入る映画を作っていましたけれども、人間がしゃべる台詞がない映画をずーっと作り続けていました。人間がしゃべる映画を初めて作ったのは、確か『モダンタイムス』（1936年製作）という映画だったと思います。このお話はサイレントで、チャップリンはしゃべらない。チャップリンが働かされる工場の社長みたいな資本家は怒鳴るとか、そういうのは台詞として出てきたりして、そういう使い分けをしていました。チャップリンはずーっとしゃべらないんですけれども、その途中で給仕をやっているレストランで歌を歌うシーンがありまして、その歌の文句を忘れないように、ワイシャツの袖口のカフスに書いたんです。出て踊りながら歌を歌い始めるんですけれども、踊ったときに手を勢いよくパッとやったために、カフスが飛んでしまってなくなってしまいうんですね。見て歌おうとするとない。大慌てになってどうしたかという、訳の分からない、つまり言葉にならない言葉をしゃべるんです。チャップリン語といひかなんといひか、まったく言語になっていない言語を創作して歌う場面がありまして、これがチャップリンが初めて声を出した映画といわれています。その前に作った映画『街の灯』（1931年）はサイレント映画です。これは目の見えない美少女といひか女性がお花屋さんで働いているんです。それを見て、「あ、あの子は目が見えない子だ。かわいそうだ、なんとかそれを治してやりたい」と思ったのがチャップリンの演じているお金のない放浪者なんです。チャップリンのサイレント時代のキャラクターはザ・ランプといひて、ランプといひるのは放浪者、要するに今でいひるとホームレスですね。その男が好意を抱いて「なんとか治してやりたいなあ」とかねがね思っていたら、あるひょんなことから大金持ちからお金をもらってしまうといひあり得ないような話ですけれども、そういうことがありまして、「このお

金で目を手術しなさい」と言って女性にお金を渡すんです。結果を言いますと、そのお金で目は見えるようになるんです。その間にチャップリンはいろいろトラブルがありまして、刑務所に入れられて、出てきたときはもうひどい状態になっていて、職業はもちろなしということ、非常にすさんだ感じで街中を歩いていました。それで偶然花屋さんのある所にやってきて、そこで彼女を見て、彼女がもう目が見えるようになったことに気付いて、「ああ、よかった」と思うんですね。そこでその女性のところに行きますと、女性はなんか薄汚い放浪者が来たということで、別に意地悪をする気はないんですけども、つまりかつて目が見えていなかったですから、お金をくれた人はもっと大金持ちの人と思っ込んでいますので分からないんです。ちょっとやり取りがありまして、そのときに物を渡そうとして手が触れ合って、その手の感触でかつて目が見えないときに触れた手の感触だと一瞬のうちに思い出して、「お金をくれたのはあなただったのですか」と分かるという非常にうまい演出です。ここにちょっと書きましたけれども、「あなただったのですか」という台詞は、たった一語“**You**”という言葉だけなんですね。これでつまりそれまでの経過が全部分かるという、この素晴らしい言葉は字幕なんです。言葉の力といってもいいと思うんですけども、一言“**You**”という字が出ただけですべて分かるという、そういうシチュエーションになると、見ている者はそういう単純な場面のほうがむしろすごく感動します。そのあと、「見えるようになったんですね」とか、そういう台詞が二つ、三つあってエンディングになるんですけども、非常に素晴らしいラストシーンです。そういうのはサイレント映画だからひょっとしてできたかもしれない。これは、しゃべるよりも字幕のほうが見ている側はしゃべり方の声音を自分なりに想像しますから、むしろ出演している女優さんがしゃべってしまうよりも、もっと感動が深いかもしれないですね。そういう名場面がありました。一つの例として挙げておきます。1930年代からトーキー映画の時代がやってきまして、そうするともう字幕はいらないということで、みんな俳優さんは台詞をしゃべることになってきて、それで今日の映画になるわけです。そこに至るまでには、声の悪い人は台詞がしゃべれなくて困ったとか、いろいろなことも映画の歴史の中ではありまして、サイレント時代の名二枚目が声が悪いために没落して消えてしまうとか、そういう人もいましたし、それから芝居のほうをやっていた人で台詞のうまい人が映画界に招かれてスターになっていくとか、いろいろそういう変遷があるわけです。トーキーの時代の一つの例として、まず『晩春』という映画を今

日はお見せしたいと思います。時間になったら、やめろと教えてくださいね（笑）。最初のスタート時間をチェックしなかったから、何時に終わっていいか分からなくなりましたので、お願いします。

司会 今ちょうど 15 分です。

品田 15 分、はい。もう、だいたいあと映画を見れば終わりです（会場笑）。まず『晩春』という映画で、これは小津安二郎の名作といわれているものですね。ご覧になった方もいらっしゃると思います。手を挙げてくださいますとは申しませんからいいですけども、たぶんご覧になった方がいらっしゃると思います。『晩春』の中で私の好きなワンシーンをこれからご覧に入れたいと思います。笠智衆が演じている大学の先生に原節子が演じている一人娘がいます。笠智衆はいわゆる奥さんに先立たれた男やもめで、娘にいろいろ世話をしてもらっていて、それに甘えてはいけけないのではないかと父親は思っています、早く嫁にやりたいと。ただ、娘のほうは「お父さんと一緒にいるほうが私は幸せよ」というようなことを言って、お嫁さんにいく気は全然ないので、それで困ってなんとか嫁にやりたいという話です。その中で今日ちょっと見ていただくのは、そういうドラマ的なところではなくて、確か大学の先生だと思いましたが、三島雅夫という俳優さんがやっている大学の先生と娘が東京の小料理屋で一緒になって一緒に食事をして、笠智衆のいる北鎌倉の家へ案内して連れて帰ってくるんですね。それは笠智衆の友達なんです。「連れてきましたよ」と帰ってきたところの場面、ほんの数分です。そこをなぜお見せするかというと、先にこういう予備知識を与えないほうがいいのかと思いますけれども言ってしまいますと、特にドラマチックな会話ではないんです。非常に日常的な会話なんです。まったく日常的なストーリーとほとんど関係ないような会話が、そこでどういう空間とか人間関係とかを作り上げるのかなあということを、ちょっと感じていただきたいと思います。補足説明は見ただいた後でまたしたいと思います。そこをちょっとご覧になっていただきたいと思います。それではお願いいたします。

<ビデオ上映>

品田 ちょっと笑われていた方もあったようで、もしあそこをそういうふう面白いなあと思われたなら、私が見せた意味がそれで通じたことになります。私はこの場面で見ただけでよかったんですね。つまり、ここには恐ろしいドラマは何もないんです。ただ日常的な会話みたいなものがあるだけですけれども、そこで人間関係の親

密さがおのずと見えてくるという、やはりこれは映画でないとちょっと表現できない素晴らしい表現ではないかと思います。「不潔だと言われた」と言いますがけれども、あれは三島雅夫が演じている友達のほうが再婚したんですね。再婚したのを知っていて、原節子はその前の小料理屋で「おじさまは不潔だ」というふうに、娘さん特有の清潔感というんですか、再婚は不潔という断定をするわけで、大人ですからそれを柔らかく受け止めて、「おれは不潔かね」という感じのことを言っているわけです。それが前段にありますから、ずっと流れで見えていますとそれが非常によく分かるし、それから別に私だけがすごく気に入っているわけではなくて、たぶんこれはこれなりに非常に素晴らしい場面だと思うんです。「海はどっちかね」というところから、最後に「頼朝公がここを都にしたわけだ」というオチがあるわけです。つまり、それくらい右左、東西南北が分からない土地柄だから、どこから攻められても大丈夫だということで、そこを都にしたんだというオチにはなっていますけれども、そのオチに至るまでの笠智衆と三島雅夫のやり取り、あれがやはり小津安二郎の映画だというふうに言ってしまうとそれきりなんですが、ああいう台詞の交換で、ある人間同士の一種の濃密な親しみみたいなものがおのずと浮かび上がってくるのではないかと私は思っています。人によっては、ここにいらっしゃる方にもいるかもしれませんが、ああいう無駄な話は必要ないという方もいるかもしれないんです。人生にそういう無駄はいらない、用事だけ言えばいいという人もいるかもしれません。いや案外いるかもしれないんですよ。私の周囲にはいます。「こんにちはと言う必要はない、要件だけ言えばいい」という方もいますけれども（会場笑）、人間関係というのはやはりそういうものでもないのではないかと思いますね。そういう極めて日常的な時間と空間をこの『晩春』という映画は非常にうまく作り出しているということで、映像と言葉との関係を一つのサンプルとして見ていただきたかったというふうに思います。笠智衆は小津安二郎の映画にはなくてはならない名優だったわけですがけれども、この人の出身は熊本県ですね。あの辺ですね。生涯なまりが抜けない人で、「ことばビデオ」のサンプルに出てくるとすぐ分かるのではないかと思います。私は実際に大船の笠さんのお宅へ伺って長時間インタビューをしたことがありますけれども、まさにあの感じの人で、芝居をしているときも普段も全く同じ人で、非常に面白い方でした。インタビューが終わって、一緒に付いてきてくれたカメラマンが写真を撮るので、私と笠さんが写真を撮るということになり、私がそこで「奥さんも一緒に撮りませんか」と言って、

奥さんはたまたまそこにおいて、その気になって一緒に入ろうとしたら、笠さんはあの調子で「いや、いいです」と言って奥さんを入れなかった（会場笑）。そういうふうになんか妙に几帳面なところとか、つまりプライベートと公のことはちゃんと区別するみたいなのがあって、それも非常に笠さんらしいなあと感じた思い出がございます。今の場面はそういう意味で、つまり『晩春』を語るときに、原節子がお嫁に行く最後の場面などは素晴らしくて感動的なんですけれども、そういうところよりも、意外とこういう何事もないところで優れた言葉と映像との関係が生まれているのではないかということで、今日は見ていただきました。もし興味のある方は、これはビデオや DVD にもなっていると思いますので、ご覧になるとまた特別面白いと思います。

アメリカでは、この映画は父親と娘の近親相姦^{かん}の話だと受け取っている人が非常に多いとかいう、そういう危険な感じは映画には全然ないし、私などは全然そういうことに気が付かなかったんですけれども、アメリカではそういわれていると聞いて、「ああ、そういわれればそうか」みたいな、小津安二郎は怖い人だとも思いましたが、そういう映画ですので、何か機会があったらご覧になるといいかと思います。もうあまり時間がないのではないかと思うんですけれども、もう一つサンプルとして今日お見せしたいのは、恩地日出夫さんという監督が3、4年前に監督された『わらびのこう 蕨野行』という、これは村田喜代子さんという方の小説の映画化です。劇団民芸の舞台にもなっています。恩地さんがこの原作を気に入って映画にした作品で、私ちょっと書きましたけれども、これは不幸なことに一般の大劇場に出ていないんですね。いわゆるシネコンとかそういう所で公開されない映画で、非常に小さなミニシアターのような所で公開されたり、監督さんがフィルムを持って回って、各地の公会堂で上映したりというような非常に苦しい闘いをしている映画なんです。作品としては非常に優れた作品で、芸術選奨文部科学大臣賞をもらったりしている作品です。これを今日なぜ見ていただきたいかという理由をまず申し上げますと、市原悦子の台詞が素晴らしいんですけれども、方言を使ったドラマなんです。この方言は日本にはない日本語の方言、つまり村田喜代子さんという方が創造した方言なんです。その方言で全編貫かれている作品です。こういう言葉の使い方もあるという、これはちょっと気が付かないとか、たいてい方言ドラマというと、それはどこがいいとか、東北なまりがいいとか関西なまりがいいとか、土地柄にふさわしいということでみんな映画作家は考えるわけなんですけれども、これは江戸時代のお話で、ここで作られて語られて

いる方言は、なんかある種そういう時代の感じを非常にうまくとらえているのではないかと思いますので、それをぜひ見て味わっていただきたい。映画というのは、そもそも一部を見せることは作った人に対して失礼で、本当のことを言うと全部見なくてはいけないんです。でも、そもいかなしいし、これは映画を見る会合ではないですから、作った人には申し訳ないけれども、ちょっと一部だけ、そのかわり編集したりしないで、一応映画の流れと、映画が持っている時間がありますので、それに即して最初から 10 分ぐらい見ていただきたいと思います。この『わらびのこう 蕨野行』という映画は、いわゆる姥捨ての話です。人間が 60 を過ぎるとその村から去って、つまり食いぶちを減らすために去っていく。人里離れた所に行くと、はっきり言うと死を待つということなんです。全体のくくりとしてはそういうお話で、蕨野というのは老人が行く所なんですね。蕨野という場所に行くお話です。この映画の場合ですと、食べ物ももらいにまた里に下りてくるというか、里を訪れるというお話になっています。ただ、そこで一度蕨野に行った人たちは村落にいる人と一切言葉を交わしてはいけないというお互いの制約みたいなものがあって、村にいる人もその人たちがどんなになつかしくても声を掛けてはいけないというような、そういうシチュエーションです。ですからここで味わっていただきたいのは、撮影が非常に素晴らしいので、撮影と方言のコンビネーションといいましょうか、そういう結び付きがどんな感じを出すかということをお互いに感じ取っていただきたいということで、こっちのほうからこれはこうですよと言いませんので、何かそこに感じ取れるものがあつたら、ぜひ感じ取っていただきたいと思います。それでは、ちょっとご覧になってください。

<ビデオ上映>

品田 こういう映画は、もっといい場面、非常に感動的なのはラストシーンがすごいんですけども、そういうところをお見せしたほうがいいのかなあと思いつつも、やはり映画というのは作り手の作った順番に見るべきだという気持ちが私にはありまして、なかなか抜粋するようなことはちょっとできない気がして、最初からずーっと見ていただきました。これは今お聞きになったように、撮影は山形県で行われたと聞いていますけれども、この方言はなんかどこにもないらしいんですね。皆さんはこれを方言だと思われたのでしょうかということなんです。そうすると、日本の方言、それからこれは江戸時代中期という設定ですけども、田舎にこういう所があったんだということをもし見ながら感じ取れば、この映画は明らかにそれで成功しているわけですね。

そういうところをぜひ見ていただきたいかったです。映画というのはフィクションですから、つまり虚構ですから、ある風景とある日本語を持ってきて組み合わせ、そこに出演している人たちの演技がそういう要素と絡まり合くと、劇的な空間（ドラマチック空間）や時間が出来上がるということを今見ていただきたいかったです。この映画はなかなかいい映画ですが、おそらくビデオ屋さんに行ってもないと思います。DVDは発売されていますけれども、有名なTSUTAYAとかそういう所に行っても簡単にはないかもしれませんね。DVDは結構高いけれど出ていますので、もし関心がおありの方はお買い求めになれば、恩地日出夫は喜ぶと思います。本当にすごく借金をしているらしいんです。ここでその話をしてもしょうがないんですけど（会場笑）。ということで、言葉と映像ということで、ちょっとサンプルをご覧いただきながら話をしてきたわけですが、言葉の問題をいろいろな形で取り上げた映画もあります。最近のところでは、ここでちょっと触れましたけれども、今年ついこの間公開された映画で『しゃべれどもしゃべれども』という映画があって、これは、今の現実に生きている私たちにいかに言語表現がうまくできなくて困っている人がいるか、という話なんです。そういう点で映像を通してそういうものを伝えていく面白さがありますので、ちょっと例として挙げました。非常にきれいな若い女性ですが、対人関係がうまくいかない、つまり人々にすんなり気に入られるようなしゃべり方ができなくて、そこでだんだん引きこもり風になってしまうとか、それから小学生が大阪のほうから転校してきていじめられて、そのいじめを突破するために、東京のしゃべり方を覚えて克服したいので落語を習いにいくという、落語を全部習う話なんです。それから、元プロ野球の選手で野球の解説をやっているんだけど、どうも口下手でうまくいことが言えない、どうしたらいいか。非常に無骨なプロ野球選手なんですね。その3人が若手の噺家のところに通ってきて、しゃべり方の勉強をするお話です。皆さんの中には別にそういう方はいないと思いますけれども、「どうもおれは人と話をするのがうまくいっていないんじゃないか」というようなことを思われる方がもしいらっしゃるとすれば、こういう映画をご覧になると、言葉とはこういうものかと映像を通して分かるという、つまり映像と言葉の問題というよりも、一種の映像を通して言葉の問題を考える作品になっていますが、そういうのもございます。映像を見ながら、これはテレビでもいいのでテレビでドラマを見ながら、言葉の問題を考えることは日常的なそういう行為の中でできますので、皆さんにぜひやっていただきたいと思うんで

す。なんかタレントがいいとか悪いとかを含めて、あいつのしゃべり方はいいとか悪いとかまで考えていただけると、映像と言葉の問題がまたそれぞれ皆さんのやり方でも見えてくることがあると思いますので、だまされたと思ってちょっとやってみていただきたいというのが、私の今日のつたないお話の結論でございます。どうも失礼しました。(拍手)

【ビデオクリップ説明】

司会 どうもありがとうございました。プロジェクターのある部屋の温度がちょっと上がっていて、温度異常と急に出てしまったようです。失礼いたしました。これから、引き続き映像を見ていただこうと思っています。品田先生の今の映画の映像に引き続いて、「ことばビデオ」に関連して実は最近、「ことばビデオ」の1巻から5巻の紹介も兼ねて、ビデオクリップなるものを国語研究所で昨年1年かけて作り上げました。その作り上げる過程を知っている国語研究所の金田智子が紹介しながら、約5分ほどビデオクリップのお話をいたしますので、ご覧になっていただければと思います。それに引き続きまして、後半で話をしてくれませう研究員の尾崎、それから前研究員の小河原さんが実際に発表でも使います「ことばビデオ5」の第2話・第3話の上映も続けてまいりたいと思います。では金田さん、ビデオクリップのダウンロードの仕方等も含めて説明をよろしく願いいたします。

金田 はい。皆さん、こんにちは。金田です。国語研究所では、平成13年度から17年度の5年をかけた、毎年1本ずつ「ことばビデオ」を作ってまいりました。これは言葉の面白さを映像と音声によって伝えようという目的を持ったものでして、中学生以上の方であればどなたでも楽しんでいただける内容を作ろうということでやってまいりました。お手元にチラシが配られておりますので、それぞれの巻のテーマですとか内容はそちらをご覧くださいいただければ分かるんですけども、このビデオは1本が1万5000円もするものでして(笑)、ちょっとお高いものなんですね。先ほど品田先生が御紹介くださった『わらびのこう 蕨野行』は、チラッと見ましたら6000円しないんです。そちらのほうがずっと安いんだなあ、やはりさすがにたくさん売れるものは値段が安く押さえられるのかなあなどと思ったんですけども、とにかく今から、このちょっと高いビデオをわざわざ買って全部見る前に、チラッと中身を見てみて、これはちょっと面白そうだなあと思ったらどこかで借りていただくとか、あるいはもし

余裕があるようでしたらお買い求めいただくとか、あるいは学校の先生などに「こういったものがありますよ」と御紹介いただくとか、そういうふうにつなげていただいただけると非常にありがたいなあと思っております。それでは、実際に国語研究所のホームページでこの「ことばビデオ」の説明用のサンプルをご覧いただくことができますので、画面を実際にご覧いただきながら、どのように進んでいけばその映像にたどり着くのかを御紹介したいと思います。今、こちらのスクリーンに見えているのは、国語研究所のホームページのトップページです。このページを下の方に送っていただきますと、ここに「ことばビデオシリーズ」というのがあります。ここをクリックしていただきますと、「ことばビデオシリーズ」のページに飛びます。ここに購入方法などが書いてあります。買わなくても、各都道府県の教育委員会などを通じて、皆様がお住まいの地域の図書館などにも視聴覚ライブラリーがあれば、そちらのほうに配布されている可能性があります。そちらをご覧いただくこともできるかと思えます。購入方法に関しましては、東京シネ・ビデオ株式会社に制作をしていただきましたけれども、こちらでの購入方法が書いてあります。そのあとに第1巻から第5巻までのタイトルが出ておまして、これを見てみたいなあと思われたら、そちらをクリックしていただくこととなります。今、私は第2巻を選びました。そうしますと、こちらのだいたいの内容が書いてありまして、前半にはどんな話があるのか、後半にはどんな話があるのかということが紹介されています。そのあと、その映像のワンシーンがここにあるわけなんですけれども、この下に「紹介用ビデオを見る」というところがあります。こちらをクリックしていただきますと、今お見せしているのはファイヤーフォックスというものですけれども、インターネットエクスプローラを使っていらっしゃる方もいらっしゃると思いますので、このあたりの出方が多少そのものによって違うとは思いますが、この場合は「アプリケーションを開く」と出てきます。ともかく先ほどの「紹介用ビデオを見る」というところを押していただくと、見られるようになっていきます。

<ビデオ上映>

金田 こういうような感じで紹介用のビデオが流れてきます。御興味をお持ちの方は、ぜひまた御自宅でネットに接続していただいて、ほかの巻に関してもご覧いただければと思います。これは一つの巻が30分～50分程度の長さで構成されておりますけれども、映画と違いまして、最初から通してすべてを見るというようなことを考えては作って

おりません。途中必要な部分だけご覧いただくとか、最初からちょっとだけ見てみるとか、最後のほうだけ見てみるのかも可能ですし、教材としてお使いになるときも、そのようにお使いいただければと考えております。ですから、この本体そのものがお手元になくても、今、紹介用のビデオでご覧いただいた部分だけ何かの機会にお使いいただいてもいいかなあと考えておりますので、ぜひ御活用ください。では、以上でビデオの紹介は終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

司会 では引き続きこれから、「ことばビデオ」シリーズ <豊かな言語生活をめざして>の5巻目「日本語の音声に耳を傾けると…」というビデオの第2話「方言の中の音声」が約14分、第3話「外国人の話す日本語の音声」が約8分、合わせて22分ですが、これを丸々見ていただきたいと思います。そのままこれが終わったら休憩に入りたいと思いますけれども、ぜひこれを見ていただいて後半を迎えたいと思いますので、よろしく願いいたします。

<ビデオ上映>

司会 はい、ありがとうございます。これでビデオの第2話と第3話は終わりです。これから休憩に入りたいと思います。非常に恐縮ですが、15分の予定ですので、この時計で3時10分に後半を始めさせていただければと思います。御協力いただければ幸いです。ここで、今日の交通事情のことでちょっと説明をいたします。

塚田 きょうは4時半の閉会を予定しておりますけれども、皆さんご存じのように、中央線が工事のため4時30分から新宿方面25分間隔になるというお知らせが出ております。そのこともありまして、迂回の路線地図を受付のほうで用意しております。お受け取りいただきまして、御判断くださるようお願いいたします。それから、休憩時間に書籍の展示および販売をいたしております。御利用ください。それでは休憩に入ります。

< 休 憩 >

「ことばビデオ」の情報源 尾崎 喜光 (配布資料 p. 4～7)

司会 それでは、後半を始めたいと思います。後半は、「ことばビデオ」の情報源ということで、国語研究所主任研究員の尾崎からの話で始めたいと思います。今この場にいらっしゃる方はお分かりかもしれませんが、先ほどの第2話のビデオの中に尾崎さん御自身が出演しておりました。お父さんの役だったですね。記憶がある方はなんと

く分かったかと思います。今回の発表者は品田先生も含めてビデオに直接、間接に関わった人が出ている状況で、最も第5巻に関係があったということで次に尾崎さんにお話をお願いいたします。

尾崎 皆さん、こんにちは。ついに“デビュー”してしまいました当研究所主任研究員の尾崎喜光と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。このまま映像作品を見て半日がおしまいというのも楽しいのではないかと思います、「フォーラム」ということですので、残念ながらそうもいきません。少しお話もさせていただきます。最初に品田先生からは、映像作品一般といいますか、芸術作品としての映像作品についてお話を聞かせていただきました。それと比べますとぐっと堅い話になるかもしれませんが、品田先生のお話の直後にその一部をご覧いただきました、当研究所で過去5年間にわたって制作してまいりました「ことばビデオ」と称する映像作品をめぐるまして、私と小河原さんより少しお話しいたします。まず私からは、映像作品を制作する立場から、前半第2話の方言に関するお話の後半に出てきました、山形県鶴岡市での方言音声と共通語音声の使い分けに関するお話をさせていただきます。つまり「ことばビデオ」に取り入れた国語研究所の研究成果、ビデオの立場からすると「ことばビデオ」の情報源ということになるかと思いますが、そうしたことについてのお話をさせていただきます。続いて小河原さんからは、そのあとで続けてご覧いただきました第3話の外国人の日本語の映像などをめぐりまして、外国人に対する日本語教育という、現場で映像作品を活用する立場からのお話をさせていただきます。さて、山形県鶴岡市ですけれども、今この赤い丸で囲った所でございます。日本海に近い、人口14~15万人の都市でございます。国語研究所では実はこの鶴岡市で、人々の言葉が方言から共通語にどのように置き換わっていくかという言葉の変化、特に共通語化ですけれども、そうした変化を把握することを目的とする調査を過去3回、約20年おきに市民の方々400~500人を対象に継続調査している、都市でございます。方言的な特徴が豊富であることが、この鶴岡市を選んだ理由でございます。例えば音声的な特徴ですけれども、鶴岡市ではくだものの「柿」をカギ — 鼻にかかるカキ^oではなくて、ここではカギという鼻にかからないほうの発音だと思ってください — 「柿」のことをカギのように発音します。また、それから香辛料の「辛子」のシをシとスのちょうど中間ぐらいにしてカラ **si** のように発音します。それから、口からハーッと吐く「息」も列車が止まる「駅」も **e**ギのように発音して区別がありません。これは鶴岡だけではなく

て、東北方言に広く見られる特徴です。音声については全部で 31 項目調査いたしましたが、平均してそのうち何項目共通語の発音であったかを示したのがこのグラフです。線が 3 本ございますが、これは 3 回の調査を表しています。横軸は 10 年刻みの生まれ年、それに対して縦軸は共通語の音声の平均点です。このように、現在に近づくほど共通語の音声の使用が増えていることが分かるかと思います。ただ、このときの調査方法は、今スクリーンでご覧いただいているような絵を回答者に示すことによって、ネコとかカラスなどと、その単語だけを回答してもらったときの発音を観察したり、あるいは絵に描きにくいものは、例えば「口からハーッと吐くものはなんですか」のようになぞなぞ式で質問して同様に回答を求めたりという方法によって得た情報です。このように、単語を一つだけポツンと言わせる方法ですと、発音に意識が向きやすいでしょうから、ネコのことを普段はネゴのように発音している人であっても、その調査のときはネコと共通語で発音している可能性があります。そこで、発音する状況や話をする相手によって、方言と共通語をどのように使い分けているかということについても把握しておかなければ、鶴岡市での言語生活全体をとらえたことにはならないだろうと考えまして、場面による使い分けに関する「場面差調査」を 3 回目の調査の翌年、つまり 1992 年に 175 人の方を対象に行いました。音声以外の項目についてもいろいろと調査したわけですが、ここでは、ビデオ作品にも取り入れました音声と単語のアクセントの結果の一部について、ビデオでは御紹介しきれなかった調査結果も含めて少しお話ししたいと思います。さて、スクリーンの下半分のところに①から⑥まであります。まず①は、「絵／なぞなぞ」式と書いてありますが、これは従来の調査方法です。確認する意味でもう一度調査してみたということです。その下の②は、文字として書かれた単語を読む場合です。これは①以上に共通語の発音が意識されやすい状況ではないかと推測されます。その下の③は、注目する単語を含む短文を読む状況です。あとで例を御紹介いたしますが、これは架空の新聞の見出し記事です。それから次の④は、東京から来た初対面の人 — これはまさに面接調査をしている調査員と設定しましたが — 東京から来た初対面の人に向かって先ほどの③の短文を自分の言葉で伝える場面です。その下の⑤は、同様に地元の初対面の人、調査では国勢調査員としました。基本的に国勢調査員の方は、地元けれども知らない人という状況だと思しますので、このような場面を設定したわけです。地元の初対面の人と話す場面が⑤です。最後の⑥は、家族や友達と話す場面です。この場面ですと、方言の音声も比

較的使っていそうです。このような6つの場面ですが、このうちの上の三つは非会話場面、それに対して下の三つは会話場面、こんなふうにグループ分けすることができるかと思います。③の短文を読む場面については、架空の新聞の見出し記事だと先ほど申しましたが、例えば次のようなものです。上に「架空の新聞の見出し記事の例」と書いてありますが、大きな字で「猫に鈴、はやる」と書いてあります。これは「猫」の発音とアクセント、それから「鈴」の発音、この2か所が実は注目点です。これを先ほどの④のよそから来た初対面の人と話すときですと、例えば赤字で例として書いてありますが、こんなふうになることがありました。「ネコにスズつけるのが、はやってるんですってね」、こんなふうになることが一つ期待されます。それに対して一番下の⑥は、家族や友達と話すときですけれども、こういう状況ですと、例えば「ネゴさスズつけんな、はやってんだとの」。こんなふうに言うことが十分期待されます。ネコの「コ」が「ゴ」になってネゴとなるわけですが、方言の発音で行われるわけです。そのようなときには、「ネコに」の「に」も方言の「さ」に置き換わって「ネゴさ」のようになることが十分ありそうです。さて、その調査結果ですが、方言音声と共通語音声の使い分けは、いろいろな発音に認められたというわけではなく、次の三つの項目でした。一つは、(1)といたしましたが、語頭以外のカ行音・タ行音をガ行音・ダ行音にする発音です。こうした現象を有声化と呼んでいます。例えば「猫」をネゴのように発音することです。それから(2)は、イ段音をウ段音に近づけた発音です。これは、少し専門の言葉では母音 i の中舌化と呼んでいます。先ほども出てきましたが、香辛料の「辛子」をカラスにちょっと近く発音する。つまりカラ si のような発音です。それから、(3)は単語のアクセントですが、この単語のアクセントにも使い分けが認められたケースが少なからずありました。ここではその中から、ビデオでも御紹介いたしました「猫」の発音、つまりネコと発音するか、それとも有声化したネゴと発音するか。それから猫のアクセント、つまりララ (HL : H は高く、L は低く発音する) と共通語のアクセントで言うか、それともララ (LH) という方言のアクセントで言うか、このへんについて見てみることにしたいと思います。まず発音について見てみますと、①②③のような非会話場面では、ほとんど共通語のネコであることが分かります。ところが、会話場面であります④⑤⑥では方言音声のネゴも結構見られるようになります。⑥に近づくほどその数値は高くなり、⑥のネゴの数値はネコとほとんど同じになります。つまり、家族や友達との会話では、方言のネゴという言い方はまだまだ使わ

れているわけです。ビデオでは、この資料のうちの④⑤⑥を、このようなグラフで示したわけです。そしてドラマでは、デパートの店員さんやホテルのフロントの人がお客さんと話をするときは、「雪」をユキと共通語で発音させたのに対し、フロントの同僚同士ではユギと方言で発音させたわけです。「猫」の単語アクセントにも方言と共通語の違いがあります。共通語はネコ（HL）というアクセント、これを頭高型（あたまたかがた）と呼んでいます。共通語ではネコ（HL）のように、ネが高くコが低いアクセントで発音します。それに対し鶴岡の方言のアクセントではネコ（LH）、ネが低くコが高くなります。尻が高くなっていますから尻高型と思うかもしれませんが、そうではなくて尾高型（おたかがた）であります。鶴岡では尾高型で発音しています。アクセントは①②③でも方言アクセントが少なくありません。しかし、どちらかといえばやはり共通語アクセントのほうが優勢です。ところが、会話場面である④⑤⑥では、方言アクセントのほうがむしろ優勢でして、特に⑥の家族・友達では今でも8割の人が方言アクセントを使っています。ビデオでは、ドラマとしてはアクセントは扱いませんでしたが、④⑤⑥についてデータとして示したのが次のこのグラフというわけです。発音に、共通語のネコと方言のネゴの2種類があり、そしてアクセントにも共通語のララ（HL）と方言のララ（LH）の2種類があるということになると、その組み合わせは2×2で4種類ということになります。それを書いたのがイコールの右側ですが、いちばん上の1は発音もアクセントも共通語のネコ（HL）という言い方です。その下の2は、発音はネコと共通語だけれどもアクセントは方言のネコ（LH）という言い方です。その下の3はその逆でして、発音はネゴと方言だけれどもアクセントは共通語のネゴ（HL）です。そして最後の4は、発音もアクセントも方言のネゴ（LH）という言い方です。さて、ここでクイズですが、調査したところ、この中に、鶴岡市で実際にはほとんど使われていない組み合わせが一つあります。さて、それはいったいどれでしょうか。ちょっと考えてみてください。1番のネコ（HL）、これは共通語が二つあるわけですから、使われていないだろうと思われる方、ちょっと軽く手を挙げてみてください。いらっしゃらない。2番のネコ（LH）、これはちょっとないだろうなと思われる方、ちょっと手を挙げてみてください。はい、ありがとうございます。では3番のネゴ（HL）、これは使われていないだろうと思われる方、ちょっと手を挙げてみてください。はい、結構いらっしゃいますね。ではもう一つ4番のネゴ（LH）、いくらなんでも発音もアクセントも方言というのではないだろうと思われる方、ちょっと手を挙げて

みてください。これはいらっしやらない。はい、どうもありがとうございました。使われているものに丸を付けてみると、こんなふうになります。まず両方共通語の1番ですが、これは使われています。それから4番の両方とも方言、これも実際に使われています。さて、残るは二つですが、実際に使われているのはこのうちのどちらかという、2のほうです。ネコ（LH）は鶴岡でも実際使われています。使われていないのは、発音は方言けれどもアクセントは共通語のネゴ（HL）です。これが実際にはほとんど使われていません。理屈で考えるとあってよさそうに思うのですが、ほとんど使われていません。ビデオではそこまで示すことはできませんでしたが、組み合わせのパターンとして示した調査結果のグラフが次のこれです。先ほどの1の発音であるアクセントも共通語のネコ（HL）、これは非会話場面を中心にこのように使われています。それから先ほどの2番のネコ（LH）ですが、これは③④⑤を中心に使われています。そして先ほどの4番のネゴ（LH）ですが、⑥の家族・友達を中心に使われています。そして問題の3ですが、ご覧のようにどの場面でもほとんど使われることはありません。細かく見てみると、⑤のところに1.7という数値が出てきますが、ほとんどゼロに近い言ってよいかと思います。このネゴ（HL）という言い方ですが、これは架空の方言的発音とでも言ったらよいものかと思います。スクリーンの下のほうにまとめを書きましたが、「猫」のコをゴと発音するのであれば、アクセントも方言のララ（LH）でそろえなければおかしい、ということのようです。この、調査で得られた発音とアクセントの関係の情報が、映像作品の世界にどう貢献する可能性があるのかということについて、最後に少し考えてみたいと思います。テレビドラマや舞台演劇では、その地方らしさを出すために方言を織り交ぜることはよくあることです。先ほどの品田先生のお話の中で拝見した映像の中にもありました。地元の人が演じるのであれば問題ないと思のですが、そうばかりではないわけです。よその土地の人がその方言をまねて話すときは、台本がおそらく頼りになると思います。その台本は、文字で書かれているわけですが、例えば「猫」をネゴのようにカタカナで表記して発音の違いを示すことは簡単にできると思います。しかし、単語のアクセントの違いまで一つ一つ丁寧に記すことは難しいのではないかと思います。首都圏出身の人であれば、「猫」のコをゴにはする、けれどもアクセントは共通語のままという、そういう可能性は十分ありそうに思うんですが、実はその発音は当の地元には存在しないわけです。もし発音を方言にするのであれば、アクセントも合わせて方言にしなければ、地元の

人にとってはちょっと不思議な言い方になります。そうした、地元ではあり得ない言い方を回避するために言語研究が貢献できる可能性があるのではないかと考えています。最後におまけですが、これは国語研究所が鶴岡調査の調査本部として使わせていただいた鶴岡ホテルという純和風の旅館です。それから、これは鶴岡市内でのロケ現場の写真です。左上は鶴岡駅前でのロケです。左側に出てくる人物は、次にお話をする小河原さんです。右上はホテルのフロントでのロケです。左下は、先ほども最後のほうで出てきた致道博物館の前ですが、移動中の写真です。右下は鶴岡市の周辺の山並みの写真です。最後に参考文献を掲げました。内部資料ということでなかなか入手しにくいものもあるかもしれませんが、御興味がありましたら、どうぞ御参照ください。以上で私の話は終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

「日本語教育で映像を使うと」小河原 義朗 (配布資料 p. 8～10)

司会 どうもありがとうございました。引き続き、小河原さんにお話をさせていただきたいと思います。テーマは「日本語教育で映像を使うと」ということで、ビデオを活用する立場からというお話です。小河原さん御自身は北海道に今おられて、北海道大学の留学生センターで実際にビデオを活用していただいて、その結果の報告も含めてしていただく予定です。では、よろしく願いいたします。

小河原 小河原と申します。よろしく願いいたします。私は、日本語教育という現場で映像をどのように使うのかというテーマでお話をしたいと思います。その前に、私の所属しております大学という機関で日本語教育がどのように行われているのかというところから簡単に御紹介したいと思います。私たちが小学校のときに教えてもらった国語科の国語教育とは違いまして、第1言語(母語)を日本語とする人に日本語を教えるのではなく、つまり母語が日本語ではない、主に外国の人に対して日本語を教えることを日本語教育といいますけれども、そういった日本語教育を受ける日本語学習者が近年国内外において非常に増加していることは皆さんもご存じかと思います。例えば日本国内で大学を中心としたいろいろな教育機関で日本語を勉強する人は、13万5000人を超えている状況になっています。一方、国外のほうでは235万人を超えていて、国内の18倍ぐらいの学習者が世界の中で日本語を勉強しているといわれています。そういった日本語を勉強している学生さんたちだけではなくて、日本に経済とか理科系の勉強をしに来る留学生の人も増えていまして、現在11万7000人を超えているよ

うな状況で、そのうち北海道大学に来ている留学生は **852** 人となっています。トップは東京大学の **2200** 人という規模ですけれども、地方では結構健闘しているほうかと思えます。こういった **852** 人の留学生の人たちに対して、私たち大学の日本語教師はどんな日本語教育をしているのかをちょっと簡単に御紹介いたします。いろいろなことをやっていますけれども、主には留学生のニーズに応じた日本語教育をやっています。例えば、それぞれの外国の方々の方々の国ですでに日本語とか日本文化について研究している人たちが、さらに1年間日本に来て、自分の日本語あるいは日本文化に関する専門を深めようという人たちのためのコースもありますし、日本の大学院に入って、その研究室に入る前に6か月間集中して日本語を勉強しようという人たちのためのコースもあります。そうではなくて、大学に来ている留学生全員を対象にして、例えば初級から中級・上級、あるいはレポートを書かなければいけないとか、プレゼンテーションをしなければいけないといったいろいろなニーズがあると思いますが、そういった学習者の人に対応したいろいろなコースも行っております。では、そういった日本語教育という現場の中で映像をどのように使っているのかという話に進めていきます。この直接の問いですけれども、日本語教育現場で教師は映像をどの程度、どのように活用しているのだろうか。この問いに直接答えられるような調査は実はあまりないんですけれども、国語研究所の金田さんたちを中心にした調査がありますので、ここで御紹介したいと思います。これは国外、特にタイ、韓国、台湾、マレーシアという日本語学習者が多い国で日本語を教えている日本語教師 **1300** 人を対象にしたアンケート調査です。普段授業の中でどんなものを使っていますかという問いの中で、教科書と答える人がやはり多いです。その中で生教材というものを利用している教師が結構います。教科書は言語を教える目的で作られていますけれども、例えば私たちが普段読んでいる新聞は特に言語を教えるためのものではありません。でも、新聞の中には様々な日本語があるということを考えますと、授業の中で使えます。それを生教材といいますが、新聞や雑誌、それからテレビ番組やビデオ、インターネット、写真、マンガ、テープ、そういったものが授業の中で生教材として使われております。このように、映像という観点でいけば、ビデオやテレビが現場で使われていることが分かるかと思えます。生教材をどうして使うのかということに関しては、主に「学習者の興味・関心を引くため」、それから「日本の事物や文化に触れさせるため」「学習者に本物の日本語に触れさせるため」という目的で使われているようです。二つ目の調査は

保坂らの 2004 年の調査ですが、これも国外の日本語教師を対象に調査しています。その結果、やはり 70%が映像教材を利用しています。じゃあ、どんな映像教材なのか。教育用教材、生教材が主に使われていますが、教育教材の中では日本語教育用ビデオ。例えばある一つの文型とか文法を教えるためのビデオ、あるいは日本社会や文化を紹介するようなビデオが使われています。一方、生教材のほうでは、アニメ、映画、ドラマ、ニュース、ドキュメンタリーといったものが使われています。例えば『となりのトトロ』とか、ああいった映画、アニメ作品も海外ではよく使われているものの一つです。そういった生教材をどのように利用しているのかということに関しては、「内容を楽しむ」とか「日本文化の紹介と理解のため」、それから「学習項目の導入」というようなものが多く利用方法として挙げられています。この利用方法に関しましては国際交流基金の調査がありまして、「内容について感想を言う」「自国と違う点を指摘する」「言語や表現に着目させる」が多いと^{あな}築島の 2006 年の調査で報告されています。では、このような日本語教育現場での利用方法なんですけど、実際に具体的にどのように映像を使うことができるのかについて、ここでぜひ皆さんと一緒に考えてみたいと思います。国語研究所の「ことばビデオ」4『暮らしの中の「あいまいな表現」』というビデオがありますが、その中の2分間をこれからご覧いただきたいと思います。例えば皆さん御自身が外国の人に何かを教えようとした場合に、その2分間の映像を使って何を教えることができるか。それを考えながらご覧いただければと思います。それでは、ちょっと2分間ほどお願いいたします。

<ビデオ上映>

小河原 今、時間にして2分ぐらいですけども、この2分間を授業の中でどのように使うか、何をトピックとして与えて授業で利用することができるかを、これから具体的に考えてみたいと思います。ちょっとこちらでまとめてみましたので、ご覧ください。今の2分間の映像を見たとして、楽しむ方法、それともう一つは情報を得るというように大きく二つに分けております。楽しむといった場合に、今の2分間のビデオの映像はもともと教育用のビデオですので、それを見て楽しむことはあまりないかもしれませんが、例えば『となりのトトロ』とか先ほどの品田先生の映像を見ると、楽しんだり鑑賞するといったことはもちろんあるかと思えます。その次に、ここでは情報を得る方法をちょっと具体的に話したいんですが、情報を得るといった場合に、今の映像の中で、言語による情報か、あるいは言語によらない情報かという二つに大きく分

けられるかと思えます。例えば言語による情報として何が考えられるかですが、これは今の2分間のビデオのいちばん最初の部分を書き起こししてみたものです。「腹減ったなあ。姉ちゃんの友達来てるんだらう。昼ご飯食べてくのかなあ」「そうねえ、聞いてみようか」「はい」「ヒカリちゃん、よかったら、お昼ご飯メグミと一緒にどう?」「ああ、でも……」「食べていきなよ」「そうよ、遠慮しないで」「でも、やっぱりちょっと……」「そう、じゃあ、また今度ね」と。ちょっとあまりいい言い方ではありませんが(笑)、この書き起こしを見ていただくと分かると思うんですけど、話し言葉の特徴が頻繁に出てきているのが分かるかと思えます。普段書き言葉では出てこないような特徴、例えば「腹減ったなあ」と言ったときの「が」という助詞が落ちてしまったり、「腹減ったなあ」の「なあ」は終助詞ですね。それから、「姉ちゃんの友達来てるんだらう」は「来ているんだらう」の「い」が抜けてしまったり、「昼ご飯食べていくのかなあ」の「い」が抜けています。それから、「そうね、聞いてみようか」「はい」の「はい」がちょっと延びてしまったり、あるいは「ヒカリちゃん、よかったら、お昼ご飯メグミと一緒にどう?」、ヒカリちゃんは「ちゃん」が付いていて、メグミは「ちゃん」が付かないとか、あるいは2行目は昼ご飯と言っているのに、お昼ご飯の「お」が付くとか、いろいろな可能性があるかと思えます。こういった話し言葉の特徴を授業の中で取り扱うのも一つの方法かと思えます。そうではなくて、見た映像をどのように理解するかということも、もちろん一つの利用として考えられます。例えば2分間の映像を見たうえで、教師のほうがあらかじめ「じゃあ、ヒカリちゃんは断ったでしょうか」ということを質問としてとっておいて、それを学習者が見終わったあとに答えるとか、あるいは質問ではなくて、あらかじめ書いておいたものについて○×を付けるとか、2分間の映像を要約して書いてみてくださいとか、あるいは、書かないにしても、誰かに話して伝えてくださいということもできるかもしれません。また、登場人物の人間関係を考えてみましょうということもできますし、あるいは聞く人物、例えば私はヒカリちゃんであなはメグミということで、聞き取ったものを出し合ってみたり、あるいはビデオは教師のほうで自動的に止められますので、話の流れを途中で止めて、次の展開を予測してみたりとか、次にどういう発話が出るだろうかを予測することもできます。また、映像を基にして何が起きていたかを一つ一つの文字に起こしていく(ディクテーション)こともできますし、最近ではシャドーイングというのがありますけれども、発話のあとに続けて自分も繰り返してみることもで

きますし、あるいはビデオですので音を消して、例えばディクテーションしたものを、自分のパートがヒカリちゃんだったら、ヒカリちゃんのところまで自分が発音してみる、それを録音してみることもできます。あるいは字幕を書き取ることもできると思います。これは例えば大学の講義などでメモを取ることの練習になったりするかもしれませんが。言語による情報だけではなくて、映像には非言語の情報もあります。どんなことがあるかという、いろいろなジェスチャーが映像の中にありました。例えば、「お願いします」というときに手を合わせたり、「よし頑張ろう」というときに手をこうやっていますね。こんなことも外国の人からすれば学習の対象かもしれません。また、いろいろな表情がありますし、習慣、子どもが料理を手伝うのかとか、あるいは服装、部屋の様子なども学習者は気になるところです。例えばある学習者は、今の映像を見て蛇口の浄水器にすごく興味を持ちました。そういうことは教師のほうではあまり予測がつかないんですけれども、学習者からすると、どこに興味があるか分からないということがあるかと思います。さらに、情報を得ることを目的にしないで、映像を別の目的のきっかけにすることもできます。例えばこの映像は「ちょっと」というものを狙った映像ですけれども、「ちょっと」という表現を日常生活でほかにどんなときに使うか、それを学生に外に行って持ってきてもらう。あるいは、生の教材（新聞やテレビ）の中からもいろいろ集めてもらうことができます。さらに、集めただけではなくて、「ちょっと」だけを使うことはあまりありませんので、例えば「申し訳ありませんが」と最初に謝るとか、あるいは理由を言うとか、そういう「ちょっと」の前後について見てもらう。あるいは、「ちょっと」というものが音調によってどう変わるか。例えば、「すみません、ちょっと」と「ちょっとー」では意味が変わるんですね。そういうものを日常生活の中から持ってくることもできるかもしれません。また「断り」ですけれども、普段私たちは、コミュニケーションをしているときに断るのは結構難しいことかと思います。そのときにいったいどうやって断っているのか、何を考えながら断っているのかということも考える必要があります。考えるだけではなくて、例えば日本人にインタビューすることもできます。またさらに、実際にそうやって聞き取ったものを知識として持っているだけではなくて、場面を作って演じてみることもできるかもしれません。それをビデオに撮ることも最近では簡単にできるようになっていますので、そういったことを通して日本語を勉強することもできます。またさらに、あいまいな表現がこのビデオのテーマですので、これまで日本人とのコミュニ

ケーションの中でどんなときにあいまいな表現で困ったか。例えば相手の使う言葉が分からなかったとか、あるいは自分がはっきり言いすぎて困ったとか、そういうことがあるかもしれません。そういったものを使って、例えば自分の国ではあいまいな表現をどう使い分けているか、あるいは使い分けていないのか、そういったことなどをディスカッションすることもできるかもしれません。このように、映像を全部通して見なくても、例えば一部を使ってこれだけのものができることが分かります。たぶん会場の皆さんはほかにもいろいろなことを考えたと思いますけれど、そういったところを授業の中で映像を使いながらいろいろ利用が可能であると考えられます。今までは教師の側から映像をどのように利用するかということを考えてきましたが、学習者のほうはそもそも映像をどう見ているのかをお話ししたいと思います。学習者はどのように見ているかに関しては、ほとんど調査はありませんが、唯一国語研究所では大規模な調査を行っております。先ほどと同じタイ、韓国、台湾、マレーシアの国で2万人を超える学習者に対して調査を行っています。そこで、「日本語の授業以外で日本語を見たり聞いたりすることはありますか」という質問をしています。国外の学習者がどれぐらい教室以外で日本語を見たり聞いたりしているかということですが、このように90%の人たちがなんらかの形で日本語を見たり聞いたりしています。何を見ているのかということですが、このようにテレビとかマンガとか、あるいはビデオ、CD、アニメといったものが多く挙げられています。つまり、国外（海外）であっても、このようにテレビや映像を通じて日本を見たり聞いたりしていることが分かるかと思えます。じゃあ、どうして学習者は見たり聞いたりしているのでしょうか。「楽しいから」「日本語に触れたいから」、そのへんがやはり答えとして多く出てきます。ここまで見てくるともうお気付きかと思えますけれども、先ほどの教師との関係です。教師は教室の中で学習者の興味・関心を引くために映像を使っています。その一方で学習者は、言われなくてももう教室の外で自由に自分の好きな時間に好きなものを楽しんでいることが分かります。そうするともしかすると、映像を利用する場合、教師が考えていることと学習者が期待していることはちょっとずつ変わってきているのかもしれないということも分かります。例えばこれは築島の報告ですけれども、海外の教師と学習者に知っている日本人を挙げてもらったわけです。そうするとこのように、教師のほうからは小泉首相、イチロー、夏目漱石と挙がっていますが、学習者のほうからは宇多田ヒカルとか嵐とかV6とか木村拓哉とか、そんなのがバアアッと挙がって

くるわけです。じゃあ、知っているアニメはというと、教師からは『ドラえもん』『クレヨンしんちゃん』とか出てきますが、学習者からは『新世紀エヴァンゲリオン』とか『セーラームーン』とか出てきます。私も小学生の子どもがいますが、もうついていけない状況になっています。このように、学習者は教室の外でいろいろなものに触れているんだということが分かるかと思います。このように見ますと、教師と学習者の間でもうすでに映像との接触量が変わってきている可能性があります。そうすると、教師は学習者の興味を引いて何かを教えようというように、限られた時間で限られた映像を使ってやろうとしますけれども、一方で学習者はもうすでに楽しんでいるわけです。そうになると、映像の使い方を教師のほうで考える必要がありますし、学習者はいったいどういうものを期待しているのか、それを踏まえておく必要はあるかもしれません。つまり、なんのために何をどのように見せるか。これを教師の側が十分に考えておく必要があります。教師のほうで映像の接触が多いとももちろん考えられます。その場合、教師が与えるものがもしかすると日本はこういうものだというように与えてしまう可能性もありますので、教師が多い、学習者が多いということではなくて、なんのために何をどのように見せるかをやはり十分検討する必要があるだろうと思います。さらに一つ言うこととしては、学習者は国内外でさまざまな映像にさらされているということです。例えば、つい最近スーパーから納豆が消えるということがありました。納豆をたくさん食べるとやせられるからという話ですけれども、私の義理の母も2パック食べ続けていたんですが、結局やせられなかったわけです（会場笑）。それは冷静に考えれば納豆を2パック食べてもやせるはずがないわけですね。そのように映像がどのように解釈されるのかというところ、つまり学習者は自由に見ているわけですけれども、その映像が伝えようとしているものを読み解いていく力、もしかするとその力こそが教室の中で求められていると考えることもできるかと思います。つまり、授業において映像をどのように利用するか。それを教師のほうで考えるだけではなくて、そういう技術のレベルアップをしていく必要があるだろうと考えるわけです。もう時間になってきましたけれども、最後に国語研究所の「ことばビデオ」をどのように利用するかということをお話ししたいと思います。先ほど皆さんは、「ことばビデオ」の「日本語の音声に耳を傾けると…」で外国人の話す日本語の音声（第3話）をご覧になったと思います。それについてはたぶんいろいろなことにお感じになったかと思うんですが、私の大学の日本人学生に同じものを見てもらったらどんな感

想を持ったか、それをちょっと御紹介してみたいと思います。大きく三つでした。一つは、外国人といっても母語によって話す日本語の特徴が変わるのを感じることができたということです。外国の人というと、確かに多少変わった日本語あるいは発音だったりしますが、そこには母語によって特徴があって、またさらに母語によって理由があるんだというところが、このビデオを通じて分かってきたと言っています。それだけではなくて、例えば自分が外国語を話したときにも、もしかすると同じようなことを感じられてしまう。つまり、英語を話すときに「ああ、日本人だから、日本人のような英語になるんだろう」ということが、やはり向こうの人にも感じられるだろうということです。それから、そういった理由のあるいろいろな発音、いろいろな特徴ですけれども、そういった特徴だけからその人の人間性を判断できないだろうというところが、このビデオを通じて言いたかったことの一つであります。それから二つ目としては、周りに外国人が増えているという現実初めて気付いて驚いたということです。これは地域差はあると思うんですけれども、北海道の場合、特に札幌市は**100**人に一人というのはちょっと言い過ぎで、**0.04%**ぐらいしかいません。ですから、東京と札幌ではちょっと違うかもしれませんが、現実には外国人が増えていることは少しずつ感じられてきているところかと思います。ちょっと意外だったこととしては、いちばん下なんですけれど、3番目に出てきた二人の外国人がなぜお互いに日本語で話していたのか分からない、というコメントがあります。これは私たち日本語を教えていると当たり前現象ではありますけれども、例えば二人の外国人のうち一人は英語しか話せない、もう一人はフランス語しか話せない、そういった場合は、日本語を勉強しているんですから日本語が共通の言葉なので、そこで日本語で話すのはある意味当たり前ですね。そういったことがなかなか気付けないということがあるのかもしれませんが。それから三つ目としては、日本語を外国語という別の視点から見る。つまり、外国の人がどう受け取っているんだろうというところから、普段私たちは日本語を当たり前のように使っていますけれども、ちょっと視点を外れて外から眺めてみると、日本語にはこんな特徴があって面白いんだなというところとか、それから外国語と日本語でこんな違いがあるんだというところを見て、その面白さを感じられるということがありました。今、三つのコメントをまとめてみたんですけれども、私のほうでちょっと面白いと思ったのがありますので紹介しますと、外国人の生の会話を見て「ああ、こういうふう実際に話すんだと思った」というコメントがありま

した。これはどういうことかといいますと、この1週間前に外国人の話す日本語について授業で講義をしたんです。そのときには講義と音声のテープしか使わなかったんですけども、この映像を見てこの学生は「ああ、こういうふう実際に話すんだと思った」という話です。つまり、映像はものすごくインパクトが強いということがあります。映像によって感じるものは、たぶん話したり音声だけで伝わらないものがあるんだ、というところが感じられた一つのことです。それからもう一つは、演技がわざとらしい。皆さんもしかすると感じたかもしれませんが、映像を見ると確かに演技がわざとらしいところがあります。でもそれは、演技がいい悪いということではなくて、映像を見ると何か言いたくなるということがあると思いますね。音声とか話を聞いているだけではなくて、映像から伝わってくるものを通して、100人だったら100人がいろいろなことを感じると思います。特に私たち日本語教育という言語教育の場にいると、言いたくなる気持ちを大切に、その言いたくなったものを日本語という言葉を通じて伝えられるようにする、そのような教室にできたらいいとも考えられます。以上ちょっとまとめますと、今まで映像のいい面・悪い面の両方について話したと思いますが、そういった面を教える側がいかにか踏まえて活用するか、その辺を授業するにあたって考えていくと、更により良い映像の利用が考えられるのではないかと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

【質疑応答・ディスカッション】

司会 最初に品田先生のお話から始まって、尾崎さん、それから小河原さんとお話が続いてまいりましたけれども、お互い発表者の間でも質問したいこと、あるいは言いたいことがあるかと思っておりますので、この企画、それからビデオの出演も含めて活躍していた尾崎さんからまず口火を切っていただいて、質問があればこの中でと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

尾崎 はい。それでは、まず私のほうからお二人に伺いたいと思うことですが、これは国語研究所にとってちょっと重たい質問になるかもしれませんが、制作した側としてはこれがいったい世の中で、あるいは教育現場でどう評価されるか。活用という点については小河原さんからも話があったわけですが、その活用も含めて評価という点で、やはり作った側としては気になります。産んだ子どもがどのように世の中で認められているか、認められていないか、認められるためにはどうしたらいいか。その

辺がやはり作った側としては気になるところでして、この「ことばビデオ」をいったいどう評価するか、その辺について品田先生、それから小河原さんにコメントをいただけたらと思います。

司会 品田先生、お願いいたします。

品田 私も一応関係していますので（笑）、客観的に言えない部分もあると思うんですけども、つまり日本語について考えるという点に対して、これは非常に有効なものだと私は思っているんですね。ただ、それをどう見せていくかという、要するにそういう手続き的なことで、例えば一般の方にこれをどういう形で買ってもらうかとか、そういうことはなかなかないので、今日は、でも「ここで売っています」とずいぶん出ていますけれど、こういうところに来ないとということがあると思います。それから、これはほかのケースでも感じたことなんですけれども、日本中の教育委員会とか、そういうところを通して頒布していくようなやり方は意外と駄目なんです。教育委員会の中に非常に興味のある方がいらっしゃると、そこはいいんですけども、そういうことに全然関心のないところにそれがいってしまうと、そこでストップしてしまうみたいなことがままあるようです。この国語研究所のものだけではなくて、ほかのケースで私はそういうことを経験しています。というのは、国立フィルムセンターという所でいい映画を日本中に見せる活動をやっているとして、5作品ぐらいのパッケージにして、それを何プログラムか作って、そういうデータを教育委員会にお送りして、これを選んでどこかでやりたい所があるかどうかを周知するようにお願いするんですけども、これは地方によって教育委員会の対応の仕方にいろいろ差があります。例えば鹿児島県では非常に反響があって、やりたいという反応がたくさん返ってきたとか、どこどこではそういうのはなかったとか、要するに仲介の労を取る機関の熱心度でかなり変わってくるので、教育委員会だけでなく、なんかほかの方法も併せてお考えになることがよろしいかというふうに思います。

司会 ありがとうございます。引き続き、小河原さんのほうにも質問があったので、よろしくお願いいたします。

小河原 「ことばビデオ」をどのように活用するのかに関しては、そもそも教師がどのように利用するかという問題だと思います。国語研究所で「ことばビデオ」を提供するとき、このように使うというような使い方の可能性といった情報もあると、それはもちろん使いやすいと思うんですけども、どのように使うかに関してはやはり教師

の問題かと思うので、それはそれでいいと思うんです。そうではなくて、使えるような形になっていることが現場教師にとってはありがたいと思います。映像というものは、例えばこういうものが欲しいから自分で作ろうと思っても、なかなか労力もかかりますし、お金も時間もかかります。その意味では、映像作品とか映像としてのいろいろな資料がたくさんあると、教師としてはものすごく利用しやすいので、そういった映像作品の映像データをたくさん提供いただけることは、現場教師としてはうれしいです。あとは、どのような形で提供していただけるかという意味では、例えば簡単にダウンロードができるとか、あるいは簡単に切り張りができるとか、その辺の著作権も取っていると、私たち現場教師としてはちょっとうれしいかなと思います。

司会 はい、ありがとうございました。そのまま今度は逆に、小河原さんのほうからお二人に質問がもしあればですが、いかがでしょう。

小河原 はい。質問というか、ちょっとお話ができればと思うのは、私たち現場の教師からすると、品田先生がいちばん最初におっしゃったように、映像を最初から最後まで流して楽しむ余裕がなかなかないと思うんですね。しかも、それを鑑賞することを目的として映像を使うこともなかなか難しいかもしれません。その意味では、いい映像作品を最初から最後までではなくて、その一部を切り取って、いかに自分が考えている目的のために使うかというところで考えるわけですけれども、そういうような一つの作品の一つの部分を利用させていただくことについて、もしお考えがあれば、品田先生からコメントをいただきたいと思います。

品田 私、先ほど作家の作ったものを軽々につまんではいけないみたいなことを言ったわけですが、というのは、つまり物を作る人が一生懸命作ったものをこっちが勝手に切り刻んでいいのかということなので、学習とかそういうこととあまり関係ない基本的なことなんです。学校教育の場合ですと、そういうある部分を抜いてというのは、教科書のこともありますし、それはそれでまた別の問題ではないかと思います。つまりそれは、作品の持っている芸術性も含めながら、なおかつほかの原因もあって、そこを見せるとか読ませるとかおやりになるわけで、1個の作品を絶対に最初からおしまいまでじっくり見ないといけないというのは、それはまた硬直した考え方なので、ケースによってはその一部を引用して、要するにこれは引用ですので、そういう形でそれを教材として使うことはもちろん許されるという言い方はおかしいですけれども、利用可能というふうに私も考えています。ですから、杓子定規に「映画というものは、

最初からおしまいまでずーっと通さない限り見ちゃいけない」という気持ちはさらさららないんです。ただ、芸術作品という面からいいますとこれは不思議なもので、例えば皆さんも経験あるかもしれませんが、偶然ビデオに写っていた映像を見たら、そのワンシーンにすごく引かれて、「これはなんだろう、すごい」と思っずーっと見てしまうことがありまして、ほんとうにいい映像作品はワンショット見ただけでもうすでにいいんです。

司会 はい、ありがとうございます。品田先生から二人に何かあればですけど、いかがでしょう。

品田 特になんかと言うとあれですけど、いっぱいありますが（笑）、今日お話を伺って、私は非常に勉強になりました。要するに、僕は学校の教師もやっていましたけれども、お二人のような形でやってこなかったなあと反省があって、ちゃんとした先生ではない先生だったと今密かに反省していて、あるべき姿だと思いました。ですから質問ではなくて、たいへん勉強になりましたということです。

司会 ありがとうございます。私から一つだけ伺いたいですけれども、品田先生の最初のお話のほうで、『晩春』という映画の中で、淡々としたほんとうに日常の会話の中に、実は人の関係性とか営みが浮き上がってくるこの場面が素晴らしいというお話があったと思うんですが、それはおそらく、そこで行われている会話というか対話というか、そこがシナリオも含めて非常に良くできている部分と、非言語情報の手振り・身振りも含めて良くできている部分がきっとあるんだろうというふうに推察しましたが、あの場面の素晴らしさを改めてもう一度解説していただくとありがたいんですが。

品田 非常に難しい。非常にいいから言うのは難しいということなんですけれども、ですからほんとうのことを言うと、パーッと説明できるのは大したものではないんです。芸術というのはそういうもので、簡単に言い切れないから、そこにあるものは非常に中身の深いものがあるという変な言い方になりますけれど、そういうことです。だから結局、あそこで感じた方はたぶん感じているだろうなあとか、全員がそれを感じなければいけないというのはファシズムですから、そういうこともないわけで、ほかの部分で感じる方もいるんです。そういうことは人によって違うんです。私はあのシーンに何かを感じたんですね。何かを感じたということをちょっと言語的に分析して言うと、人間関係とか、淡々としているようでありながら、一種濃密な親密感みたいな

ものがあるのではないかとか、そういうことを私は感じたものですから、これをぜひ見ていただきたいと思いました。それから、脚本の表現として、ああいう何もないことを書くのはおそらくたいへんなことだと思うんです。それをやったという、だからそれは何かを表現することはもちろんやっているわけですが、何もないようなことを言わせながら何かを表現する難しい方法をとらないで、言えばすぐ分かるようなことを脚本に書いていくほうが分かりやすいということがあるんですが、それをやっていないところがあそこの場面のすごいところではないか。説明になっていませんね、駄目ですね（笑）。というふうに思いまして、つまり何もないのに何かを感じさせる。何もない場合はたいてい「なんか何もないじゃないか、つまらない」となるかもしれないのに、「いや、これはなんか何もないけれども、いいぞ」というふうに思わせたり感じさせたりするのは、表現者のマジックではないかと思いました。

司会 ありがとうございます。何もないのに何かを感じさせて、自分の心の中に非常に残るシーンがあることに関して、日本語教育の関係でいうと、演劇の関係者と日本語教育関係のコラボレーションが最近、時々ありまして、脚本家の平田オリザ先生が日本語教育関係者にワークショップをした時がありました。その時に、実は今の品田先生のお話とまさに同じことを言ってくださったと思うんですが、オリザさんの演劇は日常の淡々とした場面がたくさん出てくるわけですし、何にいちばん気を付けてシナリオを書くのかという質問に対して、彼は「会話ではなくて、対話をシナリオに入れ込む」と言っていたんです。先ほどの『晩春』という映画のあのシーンに関して言うと、父親の友人が突然東京から鎌倉までやってきた。娘との会話であれば、たぶん無駄のないもうほんとうにつまらない会話が続くかもしれませんが、友人が来たことによって、絶対あり得ないような鎌倉の方角の話とか全部入ってくるわけですね。そうすると、あそこでお互いが話しているものが対話だというふうにオリザさんは言うわけです。あの対話を聞いたときに、平田オリザさんの演劇は、世界中どこに持っていても言語が変わっても、最近通じることが分かってきたと彼は言っていました。おそらく言語を超えて読み解くことができるということらしくて、それはおそらく、品田先生が今おっしゃった、なんとなく感じるというところに通じるのかなというふうに思いました。ここで、あと後半十数分ありますので、皆さんのほうからもぜひ聞きたいこととかおありかと思しますので、今日は質問用紙をお配りしていませんが、マイクを持ってまいりますので、手を挙げていただければと思います。なお、

この質問等はいずれ文字化されて、お名前等は出ませんけれども、内容はウェブ上で公開されることをお断りしておきたいと思います。いかがでしょうか。

参加者 1 私は、都立高校で日本語を勉強している外国人の2、3年の生徒に国語を教えている立場で、あとは尾崎さんとも共同研究を一緒にしてまいりました。質問は、私が2006年の報告書をきちっと読んでいないので分からないのかもしれませんが、鶴岡での場面差調査の会話の場面は、その場面を実際に設定してなさっていらっしゃるのか、あるいは想像という大変ですけども、相手が外から来た人だということによって、その方たちに答えていただいているのかということが1点。それに関連すると思うんですけども、「ことばビデオ」の中で鶴岡の地元の方として出てきた方たちは、実際に地元の方たちで、実際にその方たちが自然にと大変ですが、御自分でお考えになった発話でしていらっしゃるのか、それともある種台本といたしますか、そういうものを作られていたのか。あるいは、地元の手袋の店員さんはとても美しい標準語だと思うんですけども、そういうようなことはどのようになさったのかを伺いたいです。関連しまして、同じことだと思うんですが、先ほど北大の学部生の皆さんの感想に演技がわざとらしいとあったんですけども、実際にわざとらしさを感じさせる部分は、家族の兄弟の会話とか、町で外国の人たちに会ったときの友達同士の会話とかああいうところで、実際に日本人が普通にそういう話をするのはあまりないと思うんです。例えば外国人のビデオに対する感想などを話しても、教材ですからしょうがないと思うんですけども、教材的にしゃべっていらっしゃる部分があって、それが本当に会話になっているのかどうかという気もしたんです。それが結局、実際に教材として使われているという大変ですけど、事例として使われている地元の人の会話とか、外国人の方の会話にまでそういうのが及んでいるのではないかと思わせてしまうようなところをちょっと感じるんです。そういうことで、御質問しました。以上です。

司会 じゃあ、お願いいたします。

尾崎 はい。それでは私のほうから、忘れないうちに二つあったうちの後のほうからお答えしたいと思います。映像の中で鶴岡市民かなと思われる方が出てきたと思うんですが、あそこに出てきた方は、実際に地元の方です。実は鶴岡に「劇団 麦の会」という演劇をしている市民グループがあって、ずいぶん大所帯のように聞いていますが、そこにお世話になって、一般市民でその劇団に所属している方に御協力いただいて登

場いただきました。ただ、その方々は、普通はステージで観客とずいぶん距離を置いてやっているというのが普通のことですので、今回撮影するためにカメラが間近にきているという状況は演劇の世界にはない。そこで、緊張したり普段の調子が出なかったり、なるべく頑張ってやってもらったんですけども、やはりどうしても不自然に感じてしまう面があったかと思います。それから、言ってもらっている台詞ですが、これは基本的に私どもが考えました。ただ、現地に行ってから、ほんとうにこの台詞で大丈夫か確認しまして、もし変える必要があれば変えていただいて、向こうのナチュラルな表現で行ってもらいました。フロント係の方が二人出ていましたが、居酒屋ですが、その二人に前日にシナリオをチェックしていただき、その結果を反映して演じてもらいました。鶴岡での 175 人の調査ですが、私どものほうで場面を設定して、東京から来た初対面の人、つまり「私に向かってもし言うとしたら、これはどういうふうに言いますか」と質問して、それで回答していただいた発音をチェックしました。先ほどスクリーンに赤い文字が 3 か所出ていたかと思いますが、あのような形で行った情報を整理した結果ということです。以上です。

小河原 第 3 話の中の外国の方のいろいろな発話や演技に関してですけれども、あの方たちは一応素人ではなくて、もちろんプロの俳優さんではないですが、ああいう映像やビデオやテレビ等に出演するためのある一つの所に所属していて、そこからお願いしていると。実際の対話あるいは会話はシナリオかということですが、もちろんシナリオを用意してあります。ところが、実際にあの映像を録画したときは、あの方たちが御自分でシナリオを解釈して、それを御自分の口からいろいろ押し出したという意味では、完全にシナリオと一致しているかということ、ほとんど一致していないのが現状です。シナリオ自体を理解できていないこともあるかもしれませんが、「そこはこういうことです」と打ち合わせをしたうえで、「こういう意図で、表現は感覚ですから自由にやってください」というふうに現実にはやっています。ところが、実際のところはそうなんですけれども、私たちの意図したとおりにできたかということ、それはまた分からない部分がありまして、つまり、本来はできるのにあまりできるようにしないでくださいとか、その逆に、できないんだけどもっとうまくしてくださいとかはなかなか難しいので、そこはその場でなんとかやり取りしてやったわけです。それから、そういった教材は教材としてどうなのかということに関しては、例えば先ほど日本人のコメントを出しましたが、なじみがないからかもしれませんが、演技がわざ

とらしいと言ったのは、どちらかという外国の人よりも日本人の演技に対してのほうが多かったんですね。その意味では、ちょっと外国の人の演技や発話に対して慣れていないということがあるかもしれません。あともう一つは、じゃあそれでいいのかと言ったら問題ですので、そういった演技や発話について、あれは私が実際に使ったときにはきっかけとしてしか使っておりませんで、こういうふうなことがあるとか、こういうふうな発音があるとか、こういうふうなやり取りになるということをきっかけにしたうえで、例えば実際に皆さんは周りの大学や周りの生活で外国の人とどうだったのか、あるいは実際に集うときには外国の人を授業に連れてきたり、あるいは私のセンターの授業にとにかく来なさいと、一緒に授業を見て、そこで話をしましよみたいなことにつなげている授業だったんですね。ですから、あそこで完結しているのではないという意味では、きっかけとして利用しているということがあります。よろしいでしょうか。

司会 ありがとうございます。ほとんど時間がなくなってしまったんですが、手が挙がっています。それで最後にさせていただきます。

参加者 2 今日はどうもありがとうございました。学校関係の仕事をしておりますが、個人的には文字を書き導入したりとか、そのようなことで今回のお話を伺って印象に残ったことを作品にさせていただければと思います。大学などですと、私の知っている限りではライブラリーがありまして、視聴覚関係の教材がたくさんそろっているということですね。ですから、小中学校・高校、そういう所でも視聴覚ライブラリーを用意していただいて、それらについて、先生方の頭に浮かんだ授業にふさわしいものを使っていただいて、みんなで話し合うとかして有効に利用すると非常に良いと思います。また、品田先生の映画のお話がありましたけれども、外国の方の言葉とか映画とかそういったものに、日本のほんとうに正式な良い言葉をぜひ添えていただきたい。私の息子も文学部に入りまして、最初に日本語が乱れると社会が乱れるということをよく言っていたんですね。それで高校時代に一人だけ敬語を使って、ちょっと煙たがられていたんですけど、でも敬語を使うようなそういう場面に触れていることは非常に貴重だと思います。ビデオの中でぜひ、先生方が皆さんと授業の教材を選べるようなライブラリーを身近に加えたりしていただけたらいいですし、授業で使ういろいろな教材について、日本語の良い言葉が入っているどの教材を採用するかといったことを、こちらの研究所さんで審議会のような形で検討されたらいいのではないかと

うふうに思うんです。あと、若い人たちの希望のものが映画とか様々たくさんあると思うんです。その中に美しい言葉をぜひ素晴らしい声で表現していただけたらいいのではないかと思います。

司会 はい、ありがとうございました。御意見としてしっかり記録しておきたいと思います。もう時間がほぼなくなっていました。キーワードとして「読み解く力」という言葉が小河原さんのほうから出てきました。たぶん発題者三人三様で、読み解く力をつけるためには、例えば教師の側が何をどう努力すればいいのか、あるいは品田先生の領域だと、おそらく鑑賞力という言葉になるかもしれませんが、そういう力をつけるためにはどんな工夫が必要なのかということで、最後に一言ずつお話しただいて締めたいと思います。小河原さんのほうから順番によろしいですか。

小河原 はい。読み解く力ということを上申したんですけれども、読み解く力への迫り方はいろいろあると思うんです。先ほど私はスクリーンで2分の映像を見てどういうふうに使えるかというお話をしたかと思いますが、例えば読み解く力をもっといろいろ広げて考えていくと、あの中にもいろいろな読み解く力につながるものがあると思います。つまり、一つの映像をそれぞれの人がどのように受け取るのかということは、自分だけ見てるとなかなか分かりませんが、例えば複数の人と見て、自分はどういうふうにするかを出し合って話し合うことは、一つの読み解く力につながっていくと思います。それから、私も「ことばビデオ」に係わった側からすれば、実際に映像を作ってみることはとても読み解く力に結びついていくと思います。つまり、自分が作って、こうやってこう受け取ってほしいと思ったものが、どういうふうに取り出されるのかということですね。それは例えばシナリオでもいいと思いますし、そんなお金をかけて作らなくても、今はハンディのビデオがありますから、そういったものを通してやってみると、それが読み解く力につながるのかなというふうに思います。それは特別なことではなくて、すぐに現場でやれることなので、それを教師のほうがいかに解釈してやるかということだと思います。

司会 ありがとうございました。尾崎さん、お願いいたします。

尾崎 はい。最後に難しい質問を投げ掛けられたと思いました。読み解く力とはちょっと外れるかもしれませんが、日常生活の中で使われている話し言葉、その中で「おやっ？」と思うところでちょっと立ち止まって注目し、こだわってみる。これは言葉を考えるうえで非常に大切なきっかけになるのではないかと思います。例えば、私に息

子がいまして、もう今では大きくなっているんですが、幼稚園とかそのくらいのころ、私に向かって「お父さん、これ食べてご覧」という言い方をしたんですね。これは確かに日本語ではあるんですが、親に対する言葉としてはちょっと不自然さを感じました。「何々してご覧」というのは、やはり親から子どもに対しての言葉だろうと。子どもは親の言葉をそのまま使うので、なかなか相手や場面によって言葉を使い分けるところまでは意識が行かないと思うんですが、例えばこうした「おやっ？」と思うところにちょっと引っ掛かって、日本語の言葉の仕組みを深く考える。そんなことができればいろいろ面白いのではないかと思います。

司会 はい、ありがとうございます。最後に、品田先生よろしく願いいたします。

品田 はい。今、お二人の先生のお話を聞いていて、私はやはり仕事の性格がちょっと違うので、うまいことを言えないのではないかと非常に不安を感じていたんですが、そのとおりになりましたけれど、ビデオテープに関して言えばよろしいんですか。それでしたらば、ちょっと言えるかと思います。例えば、映画だけでなく小説を読んだりするときもそうなんですけれども、私はなんか引っ掛かったところは日常的に必ずメモするようにしております。ですから、教材として使うのに適当なビデオテープがあったときに、どこがいちばん教材として使いやすいかとか、ここはちょっと疑問があるとかを、ご覧になったあとであまり時間がたたないときに一応メモって、整理されることをお勧めしたいと思います。それをおやりになりますと、次にそれを利用するとき、自分はここは使えると思ったところをピックアップして、積極的に仕事を展開していくことができることになろうかと思います。それは教材的なものだけではなくて、例えば一般の映像作品などもそうですし、それからテレビドラマでもそうですし、なんでもそうだと思うんですけれども、つまりあまり職業的に見るだけではなくて、それは頭の中のメモということで実際に字を書かなくてもいいかもしれませんが、テレビドラマを見ていて「あっ、あのタレントはいいぞ」と思われたら、それを絶対記憶するとか、それを文字にしておくと、それで一つのデータが出来上がるわけなので、日常的にそういうことをおやりになるとよろしいのではないかという、なんかあまり役に立たない感想で申し訳ないですが。

司会 ありがとうございます。短いディスカッションで恐縮でしたが、最初に品田先生がおっしゃったように、映像を通して言葉の問題を読み取る、あるいは考えるということで、どのようにしていけばいいかということで、少しでもヒントになることがこ

の会であればありがたかったかなと思いますし、活用していただければと思います。ビデオに関して、あるいは今後国語研究所が作っていくものに関していろいろ御意見がありましたら、ぜひまた別途たくさんの御意見をいただければありがたいと思っていますし、今後ともいろいろな意味で協力していただければ幸いです。今日の発題者の3人の方に改めて拍手をお願いいたします。若干オーバーしてしまいまして、すみませんでした。これを持ちまして、今日の「ことば」フォーラムを締めたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

<終了>